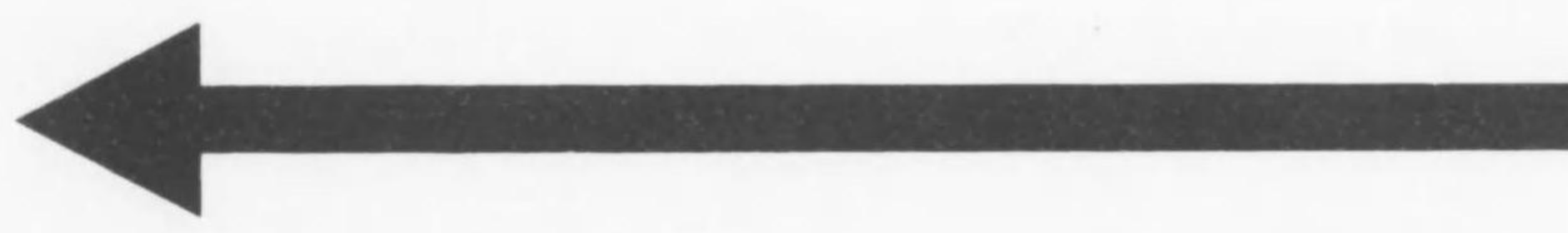


特 257
68P



始



特 257
689

序

昨年来、日本放送協會から新作能の依頼を受けて居た。ところが又、本年十一月十三日に芭蕉二百五十年忌を修するため芭蕉の能を新作せよとの依頼を日本文學報國會から受けた。そこで此の一篇を作つて兩者に對する責を塞ぐことにした。節附は櫻間金太郎、脇實生新、笛一噌鉄二、小鼓北村一郎、大鼓安福春雄、間狂言野村萬藏、三宅藤九郎。放送は前記の役者にて十月十日。演能は矢張り前記の役者にて寶生舞臺十一月十三日の筈。

昭和十八年八月二十四日

ホトトギス發行所にて

高濱 虚子

| 諸様概説 | 間狂言 | ワキ | ツレ | シテ | 役割 |
|---|----------------|----------------------------|---|--------|--------|
| | 二人 遊女 | 旅籠屋 ノ主人 | 遊女 | 芭蕉 | |
| 全体二重クレヌ様、サラリメニ大切ニ謠フベシ 着附縫箔、襟紅、女帯、ヒナシ、扇 一ヲモ・アト同装 | 鬘斗目、素袍上下、小刀、扇子 | 面小面、襟赤、髪、髪帯、着附箔、唐織 黒骨扇子 | 直面又ハ芭蕉面、唐帽子、襟淺黄、着附厚板、 茶水衣、腰帯、墨繪扇、笠、杖 | 装束附 | 季 所 |
| 目番四 (物在現) | 曲柄 警古順 | 月九 | 宿振市國中越 | 季 所 | |
| 級三 | | | | | |

奥六細道

^{ワキ}是ハ旅中、市旅の宿乃。旅籠屋の
 主人。おし新装新写の遊女を
 人。おしおのち中てつり。なほ旅人
 を待つ。おしおとある。おしおの細道
 尋ね来て。おしおの細道
 高行く事ぞ遠くまで。

チノヒ
拾子命
それ月かく百代の宿願を〜。行か
かふ年も旅人あり。かまも舟のよ
生涯を浮く馬の口取つて老を遠く
るまよ。日こ旅も〜。又夢たのり。我も
しづれの年よつら。丘の風が誘われ
こ。遠海に思ひに〜。ちんちん

ま〜春の頃。花の香もあつた。〜。
長途の旅もせめて〜。北島の月。
象河の〜。雨の月け暮れ露の
所〜。酒田の〜。白波の〜。遠く
思ひ抱き抱き。嵐が笑も〜。鼓え来た
越後とある。旅枕。暑の〜。あまの

此の如く... 中... 親... 早... 其... 其... 其... 其... 其...

此の如く... 其... 其... 其... 其... 其...

^{お下}降しんばとちま行植ゆさ日入葦の影に余
 のほつ備の影のさし下染い河我錦と影
 の圓の今日の月あざらあひたり和下
 歩のあはらぬ杖突坂を落馬といふ季の無
 き句といふあシ上クニこれ百骸九竅
 の中にお有りちつちのさびもろ風羅

坊とらに流の露の風を破れかすらん
 ともいふことおもひあ張上シは日入芭蕉
 とくをいひて傷は似て傷もあはれ
 又俗な似て似る能くぞ唯病を人に倦
 みていふ世をみこみ入も似たりミテ上
 つら年月の移り来あはれまの料

と何の仕立の地を以て佛
羅和家に入るとも為る情
を帯て智くは海の謀の事
を以てあつて供して故郷を
た田にあらむ時海に人な
るが事。口は海中に我りて

為る事なき事なし。無能を
いふは是れあり。和歌は
一紙連歌の心を推く。雪舟の
画は於ける。和休の茶は於ける。昔は
ものこりあり。和歌は萬葉の昔あり。歌
の流はありあり。和歌は

暮情をぬく入る暁の流をまは
 推くうつなり。をまは入の流をまは
 こほ能諧報ゆり秋の日はちの美く
 き山く海深く。四時の暮に
 くて。大地自然をまは。花鳥風
 月を視ゆ。神細り氣凝りて。言

暮情をぬく入る暁の流をまは
 推くうつなり。をまは入の流をまは
 こほ能諧報ゆり秋の日はちの美く
 き山く海深く。四時の暮に
 くて。大地自然をまは。花鳥風
 月を視ゆ。神細り氣凝りて。言

*

今迄来い道りよりの道りよる道りよる。思ひださ
許あり事でもなる。ニス「泣」ヨモ「朋党の夕顔殿の
今長いく文を書つて置いた。大方それ文をか
下人においで。國元へ送つて置かぬと申すから
トせて夕顔殿の文を書つて置かぬと申すから
夕顔殿の文を書つて置かぬと申すから。妻は
つた様も文を書つて置かぬと申すから。使
て置かぬと申すから。使つて置かぬと申す
た。妻も釘のおれのつて置かぬと申すから
まかぬと申すから。使つて置かぬと申す
た。妻も釘のおれのつて置かぬと申すから
あるいふ道りよる道りよる。思ひださ

三馬の夜にさるるさるる。思ひださ
とげても置かぬと申すから。使つて置かぬと申す
の。新徳殿の文を書つて置かぬと申すから。
夜にさるるさるる。思ひださ
まかぬと申すから。使つて置かぬと申す
た。妻も釘のおれのつて置かぬと申すから
まかぬと申すから。使つて置かぬと申す
た。妻も釘のおれのつて置かぬと申すから
あるいふ道りよる道りよる。思ひださ

旅衣かたむきねむりおこしひきひきおこし
して六羽け暮れつゝおるく徳の舞く
千鳥の如き思ひなむすまへし
かふけり事おそそ。流傷よこせおる
せられて賜りて。曉も流けしきそ。それ
返り待ちし。ちん月影よ待ぬおそそ。

ご舟一かお流すは。夜も寝しへく何
事ぞ。^{おツツ}夜も事ハ残一かお女たのむ。女許
りのおのあひあへ。いよつ伊勢の節
み。流傷の伴ひたまへ。事。ちんは流す
申なり。^{ちん}ちんおるいよつおるおよ。おち流
る。おるお、おちちん。いよつおの伊勢

+

まげ伴ふらんあはれもよもはる宿理をわかれ
まの思の願も飲されども。はまに一行
の流る人な情もよおさし。一の家を遊
女も帰るり萩の月。これぞ今宵の風
雅ある新くて我心し。もよおさるて面
白も今に思ひた痛の軒端の月を笠

とも見られ伏したる萩もよも。即床
と思ひ寝ぬ。また白浪の夢
さる諸も捨て舟。海士のた世を果
教たよもの身をたふさ。か。家もあま
契り。どの業因深き。おの。伊勢がま
ご我も伴ふこと。國もあはれ。あられ

あれ。昔。西。の。人。の。心。は。お。か。り。の。
宿。今。の。は。お。か。り。の。宿。共。お。か。り。の。
と。明。す。も。お。か。り。の。宿。と。月。
情。の。隔。ち。も。お。か。り。の。宿。と。月。
思。ひ。も。お。か。り。の。宿。と。月。
の。宿。を。か。り。枕。を。残。り。ぞ。更。も。惜。ま。

あ。れ。昔。の。人。の。心。は。お。か。り。の。
宿。今。の。は。お。か。り。の。宿。共。お。か。り。の。
と。明。す。も。お。か。り。の。宿。と。月。
情。の。隔。ち。も。お。か。り。の。宿。と。月。
思。ひ。も。お。か。り。の。宿。と。月。
の。宿。を。か。り。枕。を。残。り。ぞ。更。も。惜。ま。

神風のかたき女はな
れを新つらねかほの宿よあまら
あしあまらまらねしと油を
かきあひてゑの寝よまを
家子中、舞の舞はるる秋
と月お女の海たりと月お女の

彼と我とをわかれ路の秋の風
とよあまらまらねしと油を
めかへく折り時雨来をなをぬり
かきあひてゑの寝よまを
あまらまらねしと油を
しつるあまらまらねしと油を

元一第...
 け...
 ...
 ...
 ...

(出版會承認)
 1260746號

有所權作著



昭和十八年十一月五日 印刷
 昭和十八年十一月十日 發行

二〇〇部

編著者宗家

曲作

定價 金六拾錢
 特別行爲稅相當額 金貳錢
 賣價 金六拾二錢

高濱 虛子
 櫻間 金太郎

發行者 江島伊兵衛
 東京都京橋區銀座西六丁目三番地
 わんや書店代表者

印刷者 大澤音吉
 東京都四谷區四谷二丁目十三番地
 株式會社江川堂代表者

發行所 株式會社 わんや書店

支店 東京都京橋區銀座西六丁目
 電話銀座六三八・六三九番
 振替東京四一六三番
 出版會會員番號一四四五〇一番

配給元 日本出版配給株式會社
 東京都神田區淡路町二丁目九番地
 支店 東京都新宿區前二丁目
 電話四谷二五五六番

443
113

新作謡曲

高濱虚子作

金春宗家関

櫻間金太郎 曲

時宗

定價六十錢

(荷造送料六錢)

蒙古來襲を儼として退けた時宗の雄志を謡ふ。

青丹吉

定價五十錢

(荷造送料六錢)

奈良朝文化の極盛時を憶ひ「青丹吉」奈良の都を謡ふ。

東京 わんや書店發行

終